



奥の院 御影堂 鎌倉時代（重文）

五重塔から奥へ、原生林に囲まれた陶突きの石段を登ると、舞台造りの位牌堂と弘法大師四十二才の像を安置した御影堂の前に出る。方三間の単層宝形造、厚板段葺で頂上に石造りの露盤が置かれているのがめずらしく、他に例を見ない建物である。



灌頂堂〔本堂〕 鎌倉時代（国宝）

室生寺の本尊如意輪観音菩薩像（平安時代・重文）が安置される。ここは真言密教の最も大切な法儀である灌頂を行う堂で、真言寺院の中心であるところから本堂とも呼ばれ、延慶元年（1308）の建立。五間四方入母屋造りの大きな建築で、内陣と外陣を板扉で区画し、和様と大仏様の折衷様式を示す。正面に悉地院の扁額が掛けられる。



弥勒堂 鎌倉時代（重文）

三間四方柿葺のこの堂は、修円が興福寺の伝法院を受け継いだものと伝えている。内部の須弥壇に安置された本尊の厨子入り弥勒菩薩立像（重文）は、平安時代初頭の優品で、脇壇には明快な衣紋が見事な、客仏の釈迦如来坐像（平安初期・国宝）が安置されている。



室生寺の四季

室生寺の魅力は、独特の古い文化遺産もさることながら、大自然と調和して四季おりおりにうつろう伽藍のたたずまいの美しさである。室生川の清流の奥深く、蓮の蕾みにたとえられる円錐形の室生山の麓に開かれたこの寺は、文字通りの山紫水明の地に長い歴史を伝えてきた。

早春は梅のほころびに始まって、やがて山桜の老樹が深い緑の杉や檜を背景に匂い立つ。新緑が水の流れを優しく包むと河鹿がかすかに若葉を震わせ、山にはホトトギスの声が響いて境内のいたるところに深山を象徴する石楠花が咲き競う。

夏の緑陰は涼風を呼んで、天然記念物の暖地性羊歯の生い茂る奥の院への石段には杉の太木が鬱蒼と立ち並び、昼なお暗い木陰を冷気がわたる。

秋には楓の紅葉や銀杏の黄葉が深山の緑に錦を織り、秋雨に煙る尾根から落ち葉が流れて谷川を彩る。

やがて霜が静かに山に降りる頃、時には淡雪が塔を覆い、朱色の柱が白銀に映える。室生寺には、四季の移ろいを静かに語りかける文学の世界がある。



五重塔
平安時代初期（国宝）

総高 16.1 メートルと、屋外に建つ五重塔では最小のもの。勾配がゆるく軒の出の深い檜皮葺の屋根は、朱塗りの柱や白壁と心地良い対照を保つ。平安時代初頭の建立といわれ、室生山中最古の建築である。この塔は頂上の相輪が珍しく、九輪の上には普通ならば水煙であるのに、これは宝瓶を載せて宝鐸を吊りめぐらせて天蓋を作っていることなど、他に類がない塔である。平成 10 年、台風により大きな損傷を蒙ったが、平成 12 年に修復、落慶した。



金堂 平安時代初期（国宝）

金堂は、正面側面ともに五間の単層寄棟造り柿葺。内陣には、堂々とした一木造りの御本尊・釈迦如来立像（平安初期・国宝）を中心に、向かって右側に薬師如来像（平安初期・重文）、地藏菩薩像（平安時代・重文）、左側に文殊菩薩像（平安初期・重文）、十一面観音菩薩像（平安初期・国宝）の各像が並び、その前に運慶の作と伝えられる十二神将像（鎌倉時代・重文）が一列に並べられている。とくに左側に立つ華麗な十一面観音像は、ほぼ等身大の一木造りの像で、作風は本尊に近く洗練された感覚と技巧の作として注目される。本尊の背後にある大きな板壁には、珍しい帝釈天曼荼羅図（平安初期・国宝）が画かれている。